

この文書の内容の初出は
丸善 出版事業部による 2010 年 6 月刊行の「社会学事典」
第二部 第 7 章 [差別とアイデンティティの社会学] の第 5 項です

この文書は、佐倉ジェンダー研究所 w e b のコンテンツの一部となっています。
<http://homepage3.nifty.com/tomorine3908/mermaid.top.htm>

(「桜色の虹は社会学の夢を見るか」のコーナー)
<http://homepage3.nifty.com/tomorine3908/SociologyCbRw.top.htm>

佐倉智美
Copyright Tomomi Sakura since 1998.

「性同一性障害」とは、一般に今日の日本語圏では、出生時に身体を基準にして付与された性別属性に自己を合わせることに違和感や苦痛を覚えること、およびそれらを主たる動機として、自らの意思に合った性別に属性を変更した生活を試みる人を指して言う場合が多い。具体的な当事者の実態はさまざまで、性別違和の重心が身体か社会的役割かも人それぞれ。いわゆる週末のみ女装というパターンも。パス（その性別として通用すること）が困難な場合は周囲の反応が厳しく、逆に通常パスしている場合は身体や公的書類がかかわる際に期せずして出生時の性別を知られてしまう。望みの性別での生活が叶わず、本人の不満足と周囲との軋轢の中での生活を続ける当事者も少なくない。これらを包括して「性同一性障害」と呼ぶのは、英語圏での「トランスジェンダー」(transgender)に、意味的には近い用法であり、本来よりは若干広く援用されていると言える。

厳密な意味での性同一性障害(gender identity disorder)は、DSM-IV等による基準に従って医師が診断を下したケースを指す医学用語であるが、個人的なセクシュアリティを精神疾患と位置づけ医療化することの問題も指摘できる。医療セクターが取り扱うことで、ホルモン投与や性別適合手術といった“治療”ニーズに応えられるという現実的利得はあるものの、その結果巷間主流となる「性同一性障害とは身体の性別と心の性別が一致しない病気」という理解は、単純で一面的だという危惧も小さくない。そうしたこともふまえて、日本語でも「トランスジェンダー」を使うべきだという異論はあるが、現状としては「性同一性障害」のほうが言葉として普及している。

◎「性同一性障害」はなぜ障害か

そもそも障害学的に見れば、障害者とは単に相対的に少数派なだけであるところを、多数派に準拠した社会からの排除を正当化するために、そのような概念化がなされているだけととらえることができる。障害とは、じつは社会のほう障害者に対して作り出してしまっている障害物、例えば車椅子の人に対してであれば階段のことなのだ。その意味でなら「性同一性障害」をはじめ、同性愛などのセクシュアルマイノリティ(sexual minority)は、各自が望むジェンダーやセクシュアリティにかかわる自己実現に対して、多数派が“普通”としている規準が障害物になってしまっているという点で、障害者であるということもできよう。

このときセクシュアルマイノリティをとりまく障害物の核心は、言うまでもなく性別二元制と異性愛主義であり、これらにメスを入れていくことは喫緊のテー

マである。その際、それらの規範性に着目するなら、逸脱論・レイベリング論方面からの考察も可能になる。また 2003 年に成立し戸籍の性別変更を可能にしたいわゆる特例法（性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律）は、一定の意義が認められる反面、例えば戸籍制度や結婚・家族の観点から見ても、さまざまな問題点は含まれている。このほか、学校・教育、スポーツや労働、マスメディア等の面からの考察も有意義だ。もとよりジェンダーやセクシュアリティをめぐる社会秩序・社会体制は世の中のあらゆるところに張り巡らされているので、それらにかかわる研究は必然的に学際的になるし、なるべきだろう。

◎性別とアイデンティティ

「性同一性障害」におけるアイデンティティの文脈は 2 系統ある。

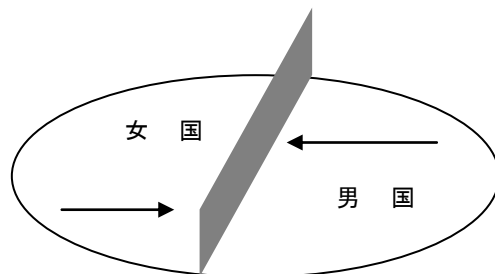
ひとつは自分をいかに社会の中に位置づけ、どのような自己肯定をおこなっていくかという課題である。既存の男女の枠の中に埋没して満足を覚えるにせよ、トランスジェンダーとしての立ち位置を積極的に評価して、マイノリティとしての自分の存在意義を認めていくにせよ、これらは本人の Q O L 向上に欠かせない。

一方もうひとつはジェンダーアイデンティティ (gender identity) である。日本語では、これを「自分が男か、あるいは女かの自己認識」ととらえて『性自認』の語を充当し、さらに『心の性別』と意識風に結び付けられたりもする。

しかし、自分がどうありたいかを考えた結果に男か女かという属性が付加されるのは、ロールモデルを参照した社会が性別二元的かつ異性愛的であったからにすぎない。性別・性差というものの正体が、個々人が希望する自己像の、その表出の結果が他者によって解釈されるにあたって、一般的基準に照らして男女のいずれかに推定され、それに応じてその後の関係性が選択的に異なってくることにすぎないとしたら、性別・性差とは、身体であれ心であれ、個々人の内部に確固として存在するものではなく、人と人との関係の中のみにはかないことになる。

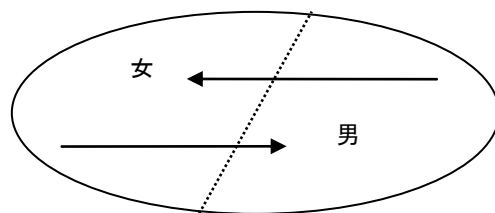
その意味では『性自認』とは一種の幻想であり、もっぱら便宜上の概念だと言える。ひとりひとりがありのままのその人である以前に男か女かを決めてしまう【性別という制度】が社会にあまねく存在することこそが「性同一性障害」を作り出しているのだという認識は重要であろう。

[佐倉智美]



間に“ベルリンの壁”がある。これがもしもなかったら

...



自由に通行できれば、誰でも自分の好みに応じた選択が可能

図：佐倉智美『性同一性障害の社会学』（現代書館 2006）より